

房総のイワシ漁業の歩みとイワシの生態 (講演要旨)

平本 紀久雄 (千葉の海と漁業を考える会)

1 イワシ漁業の歴史

イワシ漁業は、マイワシの豊凶に翻弄される歴史的に浮き沈みの激しい漁業である。江戸時代の漁法は、地引網と八手網。江戸期以降、房総半島はわが国最大のイワシ生産地になった。明治中期、アメリカの技術を取り入れた改良揚繰網(まき網)漁法が導入され、九十九里浜からはじまった。大正～昭和初期に動力化が進み、和船型まき網が主流となった。昭和30年代に漁船の洋船化・ディーゼル機関化が進み、40年代以降漁船の鋼鉄化、1艘まき網漁法が主流になり電子化が進んだが、マイワシの不漁で現在、経営は悪化している。

2 イワシはどう利用されてきたか

魚は食用のみなのか? イワシをとおして考えてみよう。

江戸～明治期は干鰯が最大の商品(金肥)になった。江戸期最大の需要は、綿花栽培。綿花栽培は江戸期の華。明治期以降、なぜ衰退したか? 昭和初期～戦前は魚油が化学工業を支えた。用途は石鹼からダイナマイトまで。生産地は朝鮮半島。1980年代の豊漁期にはフィッシュミールが主、日本の畜産、養殖漁業を支えていたが、現在のように不漁になると、食用への需要が高まる。

3 イワシの生態学

マイワシ資源は増減が激しく、不漁期間が数十年におよぶ。一方、カタクチイワシと反比例して増減しているが、その増減の振幅は狭い。洋の東西を問わずマイワシが増えるとカタクチイワシが減り、マイワシが減るとカタクチイワシが増える。要因はエルニーニョ、アリューシャン低気圧の規模など気候変動が考えられている。

代表的なイワシのカタクチイワシとマイワシは、姿かたちが違うばかりでなく、生活戦略が全く異なる。演者は、前者を「器用なイワシ」、後者を「不器用なイワシ」と呼ぶ。

紀伊半島以東を生活領域としているカタクチイワシ太平洋系群は、体長12cm以上になる大型成魚と10cm前後にとどまる2つのタイプがある。太平洋系群は、シラス期にはおもに遠州灘・渥美外海に、一部鹿島灘に分布し、未成魚は初夏から秋に房総～常磐南部まで分布を広げる。成魚は冬、あるいは夏に現れるが、豊凶を左右する大型成魚は冬常磐南部～房総沖を南下して遠州灘～熊野灘にたっし、翌春産卵する。

わが国太平洋岸に分布するマイワシ太平洋系群は、資源量水準によって小回遊型と大回遊

型の2つのタイプが存在する。前者は極端な不漁期のみに見られ、後者は豊漁期に見られる。不漁期の現在、後者は中回遊型ともとれる中間型となっている。

以上の考察から、「マイワシ・カタクチイワシ・マサバ・サンマなどの多獲性浮魚は、魚自体が豊漁・不漁で生活戦略を変える」ものと、演者は考えている。